

ISSN 0910-2396

野鳥だより

—北海道—

北海道野鳥だより第171号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成25年3月21日

ギンザンマシコ



2012. 12. 23 札幌市中央区

撮影者 石 神 直 登 (石狩市)



も く じ

私の探鳥地 (61) 天神山緑地界隈 (札幌市豊平区)

札幌市豊平区	佐伯 武美	2
寒いときの鳥類の姿勢	美唄市 藤巻 裕蔵	3
標識の付いていない標識鳥	札幌市中央区 正富 宏之	4
北海道と東京での探鳥	東京都目黒区 安 真一郎	6
ワキアカツグミの記録 (札幌市豊平区)	広 報 部	8
日本鳥類目録改訂第7版と北海道の鳥		
広報幹事代表	樋口 孝城	9
— 新聞情報から —	八雲町海岸にクロヅル	広 報 部 13
探鳥会ほうこく		13
鳥民だより		14
宿泊探鳥会のお知らせ		15
探鳥会あんない		16

私の探鳥地 (61)

天神山緑地界隈 (札幌市豊平区)

札幌市豊平区 佐伯 武美

2010年の暮れも押し迫った30日、遙かな国からのお客様さんに会いました。ナキイスカを見るのは初めてのことでした。

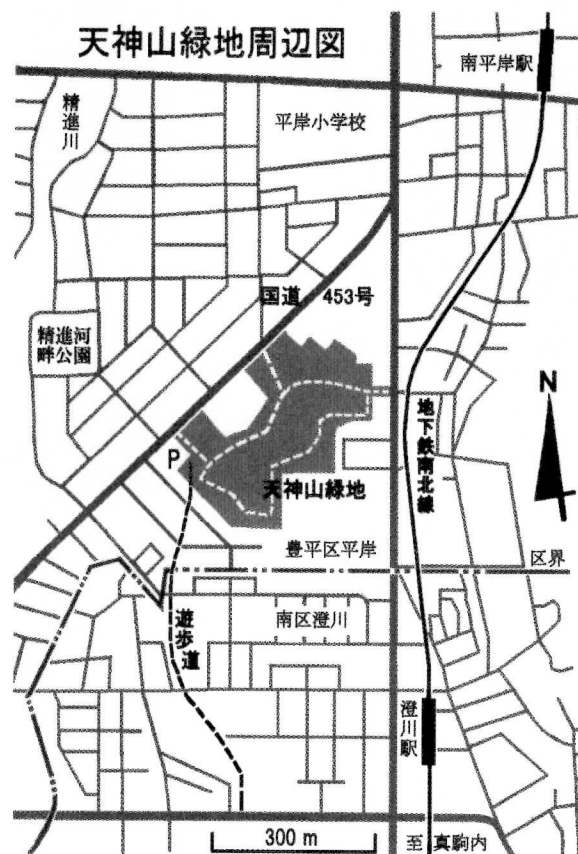
出会いの場所は地下鉄南北線の高架部分とそれと並行して平岸街道が走る、豊平区と南区の境に位置する小さな森です。この森に足を踏み入ると電車の走音や街道の車の騒音から隔絶されて気持ちが安らぎます。疎林に囲まれた小高い丘の頂にはアイヌの人たちが築いたチャシ（城砦・見張り場所）の史跡がありその隣に神社の社があります。こうした環境は人間はもちろん野鳥たちにとっても歓迎する場所になります。

春、桜の芽を目当てにウソが集い、梅の花にコムクドリがやってきて老樹となった梅の木の下に毎年スウィートホームを作ります。萌え出た若葉の間からセンダイムシクイの賑やかな囀りが聞こえ、キビタキやコサメビタキ、オオルリが旅の“羽休め”に立ち寄ります。ベニヒワの小群には記録を取り始めた1995年以来、4度出会いました。実りの秋、天神山緑地界隈にはナナカマドやコリンゴ、オンコ、マツなどが実をつけます。この緑地沿いの豊平区から南区につづく遊歩道にこうした木々が散在し、野鳥たちに日々の糧を補給しています。

2010年から2011年にかけてイスカが松の木に群れ来るのを何度も目にしました。レンジャクやアトリが群来してあっという間にナナカマドの実が消えたこともありました。このナナカマドにツグミやマミチャジナイ、そして去年暮れギンザンマシコがおとずれたのにはびっくりしました。樹下を行き交う人々を気に留める様子もなく無心に実を啄んでいました。冬を迎え積もった雪の間から覗かせるオンコの実に、飢えをしのぐと警戒心の強いシメも降り

立ちます。

天神山緑地—ときには猛禽類も姿を見せる小さな森の、野鳥たちにとっては大きな安らぎの場—わが家から5分たらずのこの森は私にとっても彼らとの交流の場となるかけがえのない場所です。



寒いときの鳥類の姿勢

美唄市 藤 巻 裕 蔵

寒くなると、私たちは衣服を重ね着したり、防寒性のある衣服を着て、「衣替え」で気温の変化に対応する。しかし、それ以外の動物ではそのようなことはない。鳥類は換羽をし、種によっては正羽の下に綿羽が多くなり防寒性をよくするが、それ以外にも寒いときには羽毛を膨らませて空気の層を厚くしたり、筋肉を緊張させ身震いして熱を発生させたり、また雪中を跔とするなどの対応策をとる。

私は帯広畜産大学に在籍中、構内の宿舎に住んでいたが、庭に餌台をつくり、飛来する鳥を観察していた。冬には鳥たちは餌台の上でよく羽毛を膨らませ、丸くなっていた。そこでこのような姿勢と気温とはどのような関係があるのかについて調べてみることにした。寒い中で餌を食べている鳥には申し訳ないが、暖かな家の中から観察させてもらった。記録をとったのは、1991年11～12月に4日、1992年1～3月に22日、12月に4日、1993年1～2月に7日、2002年1月に9日、計46日である。帯広は冬晴天の日が多く、放射冷却で寒くなり、日最低気温 -20°C 以下の日が1週間くらい続く年もあった。とくに大学は郊外にあるので、市の中心部に比べると最低気温が低く、街中の帯広測候所で -25°C のとき、大学付属農場の百葉箱では -30°C を記録するといったぐあいである。このように低温になる帯広は、気温と鳥類の姿勢との関係を見るにはよい条件を備えていた。

姿勢を次のように四つに分けた。

姿勢A：正常の姿勢で、羽毛を膨らませておらず、脚が見える。

姿勢B：羽毛を膨らませ、跗蹠の一部が羽毛に隠れる。

姿勢C：羽毛を膨らませ、跗蹠は羽毛に隠れるが、趾は見える。

姿勢D：羽毛を膨らませ、胴体部の輪郭はほぼ正球形となり、趾も羽毛に隠れる。

気温は、直射日光の当たらない家の北側で窓の外側、地上1.5mの高さに吊るした温度計を見て記録した。

給餌台に飛来した鳥類は、ヤマゲラ、アカゲラ、コゲラ、ヒヨドリ、キレンジャク、ツグミ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、ベニヒワ、シメ、スズメ、カケスの15種である。ここでは、これらのうち記録数が40例以上のアカゲラ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、スズメと記録数は少なかったが他種とは異なった傾向を示したヒヨドリの計6種について述べる。

観察している間の気温は $0\sim-30^{\circ}\text{C}$ であったが、給餌台に鳥が飛来したのは -28°C 以上になってからであった。この気温帯を $0\sim-10^{\circ}\text{C}$ 、 $-11\sim-22^{\circ}\text{C}$ は 2°C 間隔、 -23°C 以下の八つに分けたが、ヒヨドリでは $0\sim-5^{\circ}\text{C}$ 、 $-6\sim$

-10°C 、 $-11\sim-15^{\circ}\text{C}$ 、 $-16\sim-20^{\circ}\text{C}$ 、 -21°C 以下の5区分である。

気温の低下にともなう姿勢の変化を見ると(図1)、アカゲラでは -14°C まで姿勢Aであったが、これより小型のハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、スズメでは大部分の個体が姿勢Aであったのは -12°C までで、 $-13\sim-14^{\circ}\text{C}$

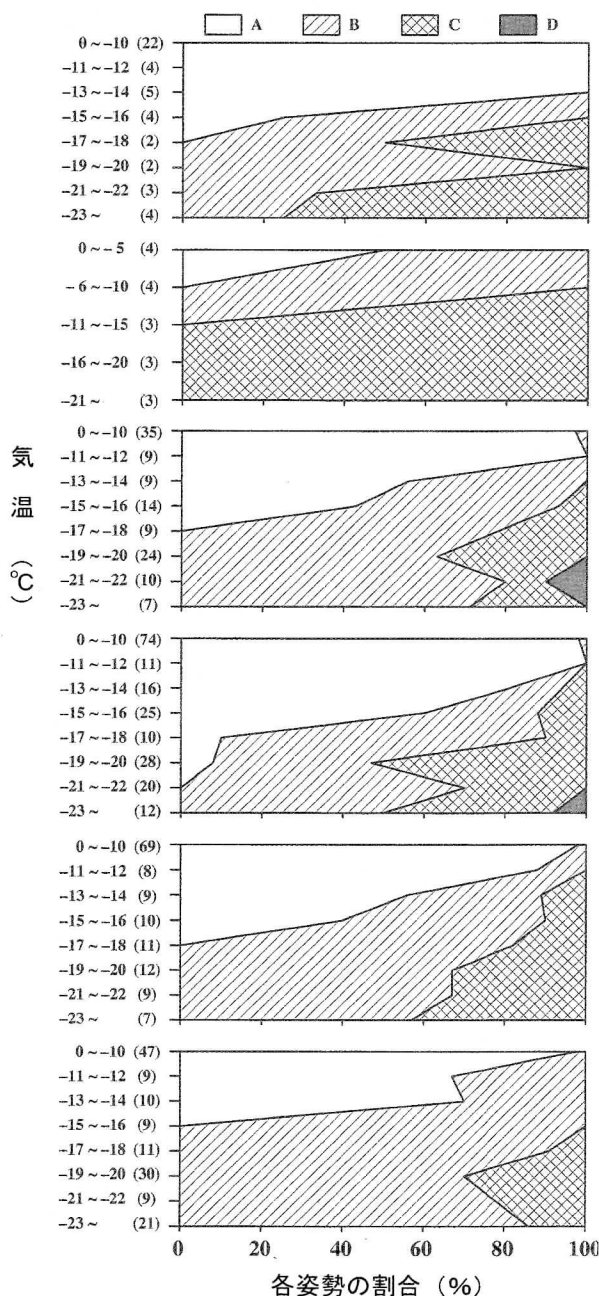


図1. 低温時の(上から)アカゲラ、ヒヨドリ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、スズメの姿勢。姿勢A、B、C、Dについては本文参照。

では20~40%前後の個体が姿勢B、Cとなった。これら5種では、-15℃以下で姿勢Bの割合が高くなり、これらのうちヒガラを除く4種では-17℃以下で全個体が姿勢B、C、Dとなる似た傾向が見られた。ヒガラでは-17℃以下の姿勢にばらつきがあったが、姿勢Aの割合は低かった。一方、ヒヨドリでは-6~-10℃で姿勢B、-11℃以下で姿勢Cとなり、他の5種より高い気温で羽毛を膨らます姿勢をとり、他種に比べて「寒がり」と言える。

アカゲラ、シジュウカラ、スズメの3種では、姿勢Bの

とき、片脚を羽毛に入れる姿勢が1例ずつ観察された。同様なことはタンチョウでも知られている。タンチョウは普通飛翔時に両脚を後方に伸ばしているが、非常に寒いときには両脚を折り曲げ腹部の羽毛の中に入れるのが観察されている。またスズメでは餌台の上に座込む姿勢が見られた。前者は脚を羽毛で覆う、後者は大気に触れる面積を少なくすることになり、いずれも寒さに対する対応策の一つだとおもう。

なお、ここに述べた内容は山階鳥類学雑誌に発表した論文「低温での鳥類の姿勢」の紹介である。

標識の付いていない標識鳥

札幌市中央区 正 富 宏 之

同種の鳥は、みな同じ姿格好や色なので、1羽1羽を見分けるのはなかなか難しい。しかし、哺乳類、例えば身近なヒトで、集団から特定のヒトを探し出すのは、最初のうちこそ難しいが、少し時間がたつと判別できるようになるのはどなたも経験済みだろう。

そのとき手がかりにするのは何か。顔かたち、髪の色、身長や体型などの外観や、声、歩き方、癖といった行動など、さまざまなものが弁別のために使われる。さらに、ヒトには名前という記号がついていて、時間と空間を越えて特定人物のイメージが保たれる仕組みになっている。

もう40年以上も前に、ヒグマの研究を志して、登別のクマ牧場へ通い個体識別を試みたことがある。4-5日もすると、20頭を超す群れで1頭1頭をほぼ間違いなく見分けられるようになった(Masatomi 1964)。

そこで、登別での経験を基に、釧路の丹頂鶴自然公園に飼われていた6-7羽のタンチョウでも個体判別を試したが、なんとかできるようになるのに、クマよりはるかに時間がかかったし、例えば20-30羽の群れになったら、ほぼお手上げ状態になる程度の確かさに過ぎなかった。

つまり、ヒグマの場合は、手がかりになる個体の特色が数多くあり、たとえこちらへお尻を向けていても一目で個体を識別できたのに、ツルの手がかりはごく微細で、多数の個体がいれば、同じ特色を持った個体が現れ、特色が特色でなくなるためだった。

しかし、ある部分の違いに個体による重なりがない、つまり1羽1羽でみな違う部分があれば、確実に個体の識別はできることになる。有名な例は、M・E・エヴァンスが用いたコハクチョウの嘴の黒と黄色の模様である(Evans 1977)。もっとも、お尻の向きからは個体を見分けにくく、コハクチョウ同士でも“ヒト”違いをしたりする。

大型の鳥はまだしも、小鳥は手がかりも体サイズに応じて小さく、かつ少なくなり、パッと見て個体を区別するのは残念ながらほとんどできない。そこで考えられたのが、ヒトが何等かの識別手掛かりを鳥に付ける方法である。ご

存知の足輪や首輪、さらにタグといわれる短冊だったり、場合によっては羽毛の染色や脚その他への色付けだったりする。最近では、小型発信機や記録装置を装着して、個体の細かな行動を記録する方法も開発され、多くの種で新たな発見に効果を上げている。

こうした標識付けにより、渡りの経路や寿命その他種々のことが解明されており、その効用については山階鳥研のHPや上田・樋口(1988)などが参考になる。ただ、標識調査では、経費・労力が掛かるほかに、軽くなったとはいえ、邪魔な物体が鳥に強制的に取り付けられ、しかもその前に、多くの場合個体を捕まえるという作業が必要となる。当然、鳥には死亡や怪我の危険が伴うし、無事であっても大きなストレスがかかる。

したがって、鳥を捕まえずに個体の識別化ができれば、それに越したことはない。

では、例えばタンチョウではどうだろうか。孵化して1歳半くらいまでは、個体により不均等に幼鳥の羽色が残るので、ある程度個体の区別はつけられる。これを利用して、道北のサロベツ原野で繁殖した家族が、直線で約300km離れた道東の鶴居村へ来て越冬するのを確かめた(図1、写真1)。

しかし、個体により遅い早いはあるものの、その後は翼をたたんで立つ姿は、成鳥とほとんど変わらなくなる。同じように、比較的長寿の中・大型の鳥、例えば猛禽類やカモメ類なども、亜成鳥の体色などで、成鳥に達するまでは、ある程度個体識別のできる場合がある。

成鳥になったタンチョウでは、顔のところの白と黒の模様、頸の黒い部分の縁にみられる細かな形、足の裏の肉色の模様、など細かな違いで個体の違いを見るしか手はなくなる。違いと言っても、ほんの微細な変異だから、その部分だけ写真で見せられても、これは“Aさんだ”と断定するのは困難という程度のものだ。

時には、白い体に黒い羽毛が混じり個体を目立たせることもあるが、所詮抜け落ち、ある日突然、目印を失った不

明個体になってしまう。それでも、持続性のある特質を持った個体もまれに現れるため、かなり長期に渡って追跡することが可能なこともある。

最近、東北地方、特に秋田へ現れたタンチョウは、そうした例の一つと言えようか。2008年3月、石狩市浜益にタンチョウが来ているとの情報をうけ、早速車で出かけた。

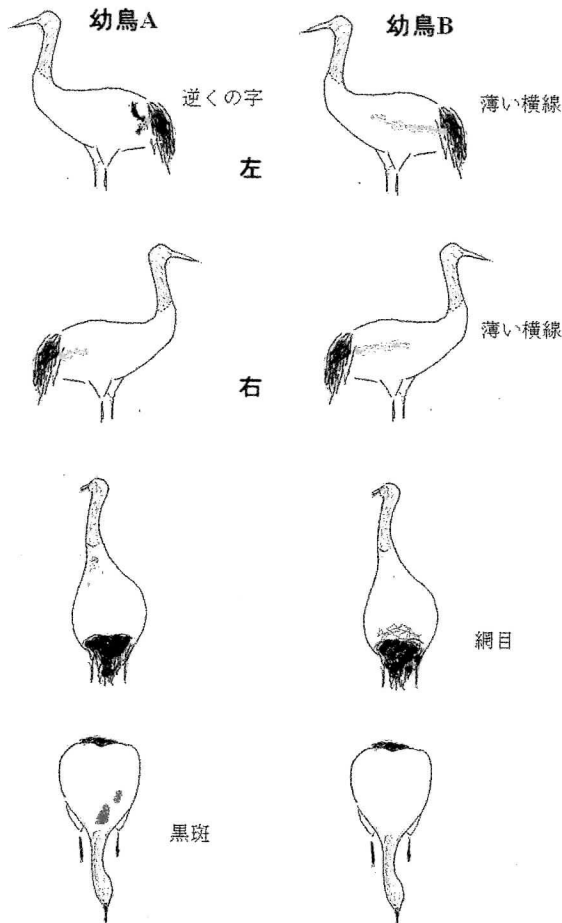


図1. サロベツ原野で育った幼鳥兄弟（姉妹？）の“ツル”相書き。同じ斑紋を持つ幼鳥連れ家族を捜すための手配書（2005年12月）



写真1. 鶴居村下雪裡で家族と共に見つかった幼鳥A（2005年12月23日 西岡秀観さん撮影）

まだ体に斑点や茶色の羽が残る1羽の幼鳥（生後10ヶ月程度）を発見。移動後にどこかで目撃されることを期待して、個体を特定できそうな体の斑点分布の記録や、前後・左右からの写真を撮りひとまず引き上げた。

その後、タンチョウ出現の情報は、蘭越町、せたな町などから舞い込み、車で走ったり、地元の人から写真を送ってもらったりして、同一個体である証拠を押えていた。が、5月になって、思わぬところから知らせが舞い込んできた。秋田県の男鹿市や大潟村をタンチョウが1羽うろついているというのだ。

早速、写真を送ってもらうと、果たせるかな浜益の個体である。この時点で、私はこのツルは北海道出身者と思い、ドサンコが海を渡った確実な証拠と考えていた。が、秋田の加賀谷幸男さんが拾われた羽をもらい受け、酪農大学の寺岡宏樹教授にDNA解析をしてもらってビックリ。なんと大陸出身者であると！

この個体は道南、道央、佐渡、ウラジオストック付近など、本州、北海道、ロシアなど巡りながら2回の冬を男鹿半島付近で過し、2011年春以降は行方が分からなくなった。成鳥になっても追跡できたのは、尾羽が左へ曲がり、極端にヒト馴れ（恐らく大陸における飼育の影響）していたことが決め手で、そのほかいくつかの模様と併せて、長期間個体の識別が可能であった。

つまり、個体の追跡には、人工の標識がついていなくても、a) 鳥を注意深く観察して個体の特徴を見つける、b) それを確実にするためなるべく多くの方向から、いろいろな行動（例えば翼を広げるなど）の写真を撮る、c) 広い範囲の追跡を想定して、情報網をシステム化する、d) 個体の情報を得るため、落ちた羽などを拾っておく（成鳥となって外形の特色が消えても、DNA解析で個体の確認が可能になる）などが有効である。

もしもこれから不審な（？）タンチョウが現れたら、上記のことを思い出し、私までご連絡を戴きたい。しかし、それは何もツルに限ったことでなく、皆さんが関心を持つそれぞれの鳥で実行して頂ければ、標識付けという手間と、同時に鳥へ負担をかけず、多くの思いがけない発見が得られるかもしれない。

ともかく情報が無いことには始まらない。だから、全道をカバーしているこの愛護会などが主軸となって、機能的な情報システムを作る作業を立ち上げて頂くことを心から希望している。

参考文献

- Evans, M.E. (1977) Recognizing individual Bewick's Swan by bill pattern. *Wildfowl*, 28:153-158.
- Masatomi, H. (1964) Social relations among young Ezo Brown Bears in captivity. *J.Fac.Sci.Hokkaido Univ. VI, Zool.*, 15: 401-417.
- 上田恵介・樋口広芳 (1988) 個体識別による鳥類の野外調査—その意義と方法—. *Strix*, 7:1-34.

北海道と東京での探鳥

東京都目黒区 安 真一郎

【デジスコ撮影にはまる】

北海道の単身赴任時期は、第1回目が1995年4月1日から1998年8月9日まで、第2回目が2001年4月7日から2008年4月24日までで、通算10年4か月強でしたが、この期間全部で鳥見をしたわけではありません。鳥見を始めたのは1997年6月8日と遅く、それ以前は海釣り、川釣り、カヌーの川下り、道内旅行で北海道の自然を楽しんでいました。カメラは400mmの望遠を持っていましたが、それで鳥を撮っても風景の中の一点にしか写らないので、何か良い方法がないかと思っていたところ、2002年6月にウトナイ湖でスコープにデジカメを付けるデジスコ撮影をされていた方から、2,000mmから3,000mmで撮れるデジスコの仕組みを聞いたことがきっかけで、資料を集め研究し2ヶ月後の8月にスコープ、デジカメ、三脚を購入しデジスコ撮影を始めました。バードウォッチャーには双眼鏡で鳥の観察だけをする人、写真を撮って記録する人、鳥の観察記録数を伸ばすために日本全国を飛び回る人と色々タイプがありますが、私は撮って記録するタイプです。東京に戻ってしばらく経った2008年6月29日からブログ「デジスコ写真人の野鳥観察」(<http://torimi.269g.net/>)で撮った写真を公開していますので、よろしければご覧下さい。

【北海道の良い点】

東京の自宅は目黒区緑が丘にあります。交通の便が良いので鳥見に行く時は、基本的には電車、バスの公共交通を利用して移動しています。北海道にいた時は、札幌周辺は公共交通で移動し、遠隔地はレンタカーを使いました。札幌から函館の大沼までは225km、サロベツまでは320km、十勝川までは288kmですが、渋滞が無いので運転が大変楽でした。羅臼には夜行バスで網走まで行き、そこからレンタカーを使いました。鶴居村には同じく夜行バスで釧

路まで行き、そこからレンタカーで移動しました。翌朝に到着して、すぐに移動できるのでとても効率的です。

長野県の戸隠神社は夏鳥で有名な所で自宅から260kmです。栃木県の渡良瀬遊水池は猛禽類のメッカで自宅から87kmですが、この2ヶ所にはまだ行ったことがありません。往きは早朝走れば渋滞は回避できるでしょうが、帰りは高速も一般道も渋滞がひどいので、どうも行く気が起きません。北海道には、タンチョウ、オオワシ、オジロワシ、クマガラ、シマフクロウ等、北海道でしか見られない鳥が多くいますが、移動だけを考えても北海道は良かったと思います。

【北海道と東京での探鳥地の比較】

10年日記をつけていますので、北海道と東京でどこに鳥見に向いたかを比較してみました(表1、表2)。2011年の観察場所で具体的な地名と鳥名が書いてある箇所は、たまたまその時期にそこで見られたもので、今年そこに行っても見ることはできないので安心して載せられます。北海道ではそんな事はないでしょうが、東京では具体的な場所を書いてしまうとカメラマンが殺到し、現地の方に迷惑をかける事態となり、その鳥が毎年来るかも知れないので具体的な場所はぼかして、北海道は2007年、東京は2011年の敢えて古い記録を載せます。

多摩川にノビタキが出た、相模川にヤツガシラが出た、葛西臨海公園にノゴマが出た、多摩市の公園にゴジュウカラが出たとなると、100名近いカメラマンが殺到するそうです。私はこれらの鳥は北海道で見えていますので行きませんが、江戸川のキガシラシトと葛西臨海公園のギンムクドリは、初めての鳥でしたので出向きました。幸いにもピークを過ぎていたのか、カメラマンは20から30名と少なかったので救われました。

表1. 2007年の北海道での観察場所と特に観察した鳥

1月	阿寒郡鶴居村(タンチョウ)、小樽、野幌森林公園
2月	羅臼町(オオワシ、オジロワシ)、西岡公園(キレンジャク、ヒレンジャク)、三笠市(フクロウ)
3月	西岡公園(ミヤマホオジロ、アトリ)、野幌森林公園(フクロウ)
4月	円山公園、モエレ沼、宮島沼(マガン)、天売島(夏鳥)
5月	利尻島(夏鳥)、宮丘公園、宮城の沢、千歳川、豊平公園、西岡公園
6月	函館大沼(アカショウビン)、福移、三笠市、野幌森林公園(夏鳥とフクロウ)、サロベツ原生花園
7月	函館大沼(アカショウビン)、西岡公園、東屯田遊水地、旭川(アオバズク)
8月	茨戸緑地、石狩川河口(クロツラヘラサギ)、野幌森林公園
9月	鶴川(シギ・チドリ)、野幌森林公園、札幌市内(チゴハヤブサ)、石狩川河口
10月	野幌森林公園、余市川(オオタカ)、恵庭
11月	野幌森林公園、十勝川(オオハクチョウ)
12月	野幌森林公園、真駒内公園、阿寒郡鶴居村

表2. 2011年の東京の自宅からの観察場所と特に観察した鳥

1月	砧公園、世田谷区野川（ヒレンジャク）、埼玉県さざ山記念公園（オジロビタキ）、神奈川県川崎市（トラツグミ、ヤマシギ）、横浜市こども自然公園（コイカル、トラツグミ）、東京都小金井公園（コイカル）、横浜市舞岡公園（ヤマシギ）
2月	千葉県我孫子市（タゲリ）、江戸川（キガシラシトド）、葛西臨海公園（ギンムクドリ、クイナ）
3月	多摩川（トラフズク）、江戸川（キガシラシトド、クイナ）、葛西臨海公園（ギンムクドリ）、八王子市（ミヤマホオジロ、アカウソ、マヒワ、クロジ）、練馬区光が丘公園（ハイタカ）、砧公園
4月	東京都稲城市（ツミ）、江戸川（キガシラシトド、コミミズク）、横浜市青葉区（ツミ）、砧公園
5月	山形県飛鳥、山梨県柳沢峠（コマドリ、コルリ）、横浜市青葉区（ツミ）、谷津干潟、多摩川
6月	逗子市、秋川、横浜市寺家（カイツブリ）、横浜市青葉区（ツミ）、神奈川県大和市（ツミ）、
7月	葛西臨海公園（アカガシラサギ、カラシラサギ、コアジサシ）、横浜市（ツミ）、千葉県（サンコウチョウ）、乗鞍高原（ライチョウ、ホシガラス）、越谷市（ヨシゴイ）
8月	葛西臨海公園（ササゴイ、コアジサシ）、埼玉県秋ヶ瀬公園（ヨシゴイ）、多摩川河口
9月	砧公園（ツツドリ、オオルリ、キビタキ）、大田区洗足池、平塚市（タマシギ）
10月	葛西臨海公園、山形県飛鳥、砧公園
11月	清瀬市金山湖（カワセミ）、神奈川県相模川（ミサゴ）、砧公園、神奈川県丹沢湖（クマタカ）
12月	川越市伊佐沼（クロツラヘラサギ）、三浦半島（ウミスズメ）、神奈川県酒匂川（コウライアイサ）、多摩川（ホオジロハクセキレイ）、砧公園

【東京の都市公園】

自宅から徒歩10分位の所に洗足池公園があります。池に突き出た弁天島にはキビタキ、ルリビタキ、ウグイス、ジョウビタキ、シロハラ等が以前は見られ2010年までは良く通っていましたが、大理石の椅子が設置され、下草や笹、木の茂みをきれいに刈ってしまい、鳥が隠れる場所が無くなったので今では鳥が寄り付きません。公園北側の桜山の桜の古木は、樹勢回復を図るために幹の上から1/3が切られてしまい、オオルリ、キビタキ、ツツドリがとまる枝が無く毛虫もつかないので同様に鳥が見られません。東京の都市公園は、鳥を見る人だけのものではないので、致し方ないのでしょうかどうも寂しい気がします。

【鳥見のマイフィールド】

今は世田谷区の砧公園と江戸川区の葛西臨海公園に良く出向いています。

砧公園では、オオルリ、キビタキ、サンコウチョウ、コサメビタキ、アカハラ、アトリ、シロハラ、ジョウビタキ、冬にはオオタカ、ハイタカ、ノスリの猛禽を見ることができます。毎日通っている方の話では、オオタカは4日に1回、カラスの狩りをするとのことで、私もこれまで3回目撃し、1回は池に沈めたカラスを掴んで平泳ぎのように泳ぐオオタカを見たことがあります。

葛西臨海公園の西渚では、2011年にコアジサシが22年ぶりに卵を産み雛が巣立ち、2012年も台風の影響で一部の卵は流されましたが2年連続で雛が無事に巣立ちました。2013年にも来て子育てをして欲しいものですが、東京オリンピックが決まると、ここにカヌー競技場を作る計画があり周囲の林も伐採され、生態系が完全に壊されます。オリンピック招致には反対はしませんが、なぜここに作らなければならないかはどうも理解できません。

【北海道では見ることができない鳥】

北海道で見ることができず、関東で見ることができる鳥の筆頭は、サンコウチョウだと思います。毎年同じ場所に行けば比較的楽に見ることができます。雄は尾が長く、嘴と目の周囲がコバルト色でとても魅力的です。雛への給餌は、雌が雄より多く運ぶ傾向がありますが、雄と雌がかち合ってしまった珍しい写真を掲載します（写真1）。次に挙げられる鳥はタマシギです。一夫多妻ではなく一妻多夫という面白い習性のタマシギは、雌が雄より派手な色彩で（写真2）、雌は卵を産むと他の雄を求めてどこかに行ってしまう、残された雄が一羽で子育てをします。雄が派手な色彩の鳥の世界では、タマシギは異端児です。



写真1. 餌の蛾を持ってきたサンコウチョウの雄（左）と雌（右）



写真2. 8月中旬のタマシギの雌(手前)と雄(奥)

【島での鳥見】

北海道にいた時は、5月の連休に利尻島、礼文島、天売島、焼尻島に出向いて夏鳥を観察しました。現在は山形県の飛島に春と秋に出向いて渡り鳥の観察をしています。夜行バスで酒田まで行き、翌朝定期船で飛島に渡ります。毎回違った鳥が見られるので楽しみです。飛島は面積2.7km²の小さな島ですが、鳥の出るポイント間は貸自転車を使って移動して、ポイントでの観察時間をできるだけ長くしています。2011年春はキマユホオジロ、マミジロツメナガ

セキレイ、マミジロキビタキ、シロハラホオジロ、秋はマミジロタヒバリ、シラガホオジロ、ノドアカツグミ、ホシムクドリ、2012年春は2日間雨で最後の半日が曇りでノジコ、秋はジュウイチ、サメビタキ等が珍しい鳥でした。毎回泊まる旅館のご主人が2011年5月に、頭から背中にかけて青く、胸がオレンジ色のルリビタイジョウビタキ(日本初記録)、黄色い体に黒い過眼線のコウライウグイスの姿を写真に撮っていますので、いつかはこれらの鳥も見ることができれば良いなと思っています。

【2012年に見た珍しい鳥の一部】

2012年に見た鳥で、その場所に行ってももう見ることができない可能性が高いものを列挙すると、1月に千葉県でソデグロヅル、2月に埼玉県吉見町でコミミズク、4月に練馬区光が丘公園のコルリ、5月に埼玉県秋ヶ瀬公園のフクロウ、6月の多摩森林科学園のヤマドリ、8月の神奈川県平塚市の田んぼでタマシギ、9月から12月の東京港野鳥公園のタカサゴモズ、12月の千葉県八柱霊園のオジロビタキが挙げられ、それぞれ楽しませてくれました。

この冬は、都内の公園ではクイタダキとウソ、アカウソが良く出ていますが、トラツグミ、イカル、アトリはまだ見られません。その年によって見ることができる冬鳥が違うのも、東京での鳥見の良さかもしれません。

ワキアカツグミの記録(札幌市豊平区)

広 報 部

2013年1月、会員の早川いくこさん(札幌市豊平区在住)から、北海道ではもとより、全国的にも希なワキアカツグミの観察報告が寄せられましたので紹介します。

最初の目撃は元旦、1月1日の午後1時45分ころで、札幌市豊平区美園の環状通り街路樹のナナカマドで採餌しているところでした。ツグミにしては羽の色が違うということで、15分ほどもかけてじっくりと観察したところ、両脇腹にはっきりとした橙色の部分があること、翼や背面・尾羽の色はほとんど一様な褐色であることなどからワキアカツグミではないだろうかと考えたとのこと。念のためということで写真を野鳥関係の知人にも見せて検討したところ、胸から脇にかけの太い縦斑が明らかなこともあり、ワキアカツグミに間違いはないということになりました。掲載写真は早川さんの知人である中村眞樹子さん(NPO法人札幌カラス研究会)が撮影したものです。

早川さんの観察では、このワキアカツグミは環状通り美園・平岸からそれほど遠くへ移動することなく、ナナカマドの実が殆ど無くなった1月20日まで、ほぼ毎日のように来ていたとのこと。時には単独で、時にはツグミやムクドリと一緒にいたそうです。ヒヨドリ、シメ、さらにはギンザンマシコも来たことがあるそうです。

ワキアカツグミは主にヨーロッパなどに生息する鳥で、日本では迷鳥として希に記録されるだけです。札幌市では1995年2月の豊平区羊ヶ丘、2011年1月の西区宮の沢、そして今回の豊平区美園の3例です。なお、羊ヶ丘の場合は1ヶ月ほどの滞在でした。今回は20日間でした。迷行といえども、札幌の冬が気に入ったのか、すっかり長居を決め込んだようです。



ワキアカツグミ 2013. 1. 4 札幌市豊平区

日本鳥類目録改訂第7版と北海道の鳥

広報幹事代表 樋口孝城

日本鳥学会は2012年9月に「日本鳥類目録改訂第7版」を発行しました。2000年9月発行の第6版では日本の鳥として542種が載せられていましたが、第7版では633種で、91種の増加です。随分と増えています。でも、今回の改訂の特徴は記載種の増加ではなく、分類の大幅な変更です。

分類とは、かなり大雑把な言い方をすれば、まず、生物の基本単位とされる「種」を区別し、区別された種を共通の性質などに従って類別し、さらには、類別されたグループを類縁関係の遠近に従って配列することです。近年、生物の分類には遺伝子の本体であるDNAを用いた研究結果が取り入れられ、従来の分類（形態的特徴などに基づいた分類）が見直されるようになってきました。鳥類の分類も例外ではありません。

分類の変更は決して一部の専門家だけに関係するものではありません。市販の図鑑類も新しい目録に合わせて改訂されていくはずですが、「北海道野鳥だより」の探鳥会報告の「記録された鳥」の配列順序は前号から既に変えています。探鳥会チェックリストは来年度から新しくなります。

さて、どのように変わったのでしょうか。その前に、まず日本鳥類目録改訂第7版、および、それに合わせて本会顧問の藤巻裕蔵さんが改訂・発行した北海道鳥類目録改訂4版をもとに「北海道の鳥」一覧を作成しました。表1は「目・科」、表2は「科・種」を並べています。全部で22目69科472種です。北海道鳥類目録改訂4版では471種ですが、ヒメウミスズメが追加されています。「亜種」については後述します。

第6版から第7版への変更点については、表1と表2を合わせ見ながら以下を読んで下さい。これらは数多い変更点のほんの一部です。「北海道の鳥」を少しだけ意識していくつかあげてみました。

- (1) 最初はアビ目でしたが、それがキジ目になりました。これに伴い、エゾライチョウが全種の先頭になりました。
- (2) タカ目の中にタカ科とハヤブサ科があったのですが、ハヤブサ科が独立してハヤブサ目になりました。
- (3) スズメ目の最後、というよりも全部の鳥の最後に載せられていたカラス科が、随分と前に出てきました。
- (4) ツグミ科がなくなり、全部ヒタキ科にまとめられました。ヒタキ科の鳥が随分と多くなりました。
- (5) ウグイス科でまとめられていたものが、ウグイス科、クキイタダキ科、ムシクイ科、センニュウ科、ヨシキリ科などに分かれました。
- (6) ホオジロ科が最後になりました。通常の探鳥会ではオオジュリンが鳥合わせの最後の鳥です。なお、その後に外来種のカワラバト（ドバト）が加えられます。
- (7) 北海道の鳥の中にメボソムシクイがいなくなり、それに相当するものがオオムシクイになりました。もちろん、鳥が変わったわけではありません。メボソムシクイの亜種で、ジジロジジロと鳴くコメボソムシクイが、メボソムシクイとは別種のオオムシクイとされました（名付けられました）。ちなみに、従来のメボソムシクイは本州以南（以西）の鳥となり、コメボソムシクイという名は日本の鳥からも抹消されました。

表1 北海道の野鳥・目と科（日本鳥類目録改訂第7版準拠）

キジ目	カツオドリ目（続き）	チドリ目（続き）	キツツキ目	スズメ目（続き）
キジ科	ウ科	セイタカシギ科	キツツキ科	ムシクイ科
カモ目	ペリカン目	シギ科	ハヤブサ目	ズグロムシクイ科
カモ科	サギ科	タマシギ科	ハヤブサ科	メジロ科
カイツブリ目	トキ科	ツバメチドリ科	スズメ目	センニュウ科
カイツブリ科	ツル目	カモメ科	ヤイロチョウ科	ヨシキリ科
ハト目	ツル科	トウゾクカモメ科	サンショウクイ科	レンジャク科
ハト科	クイナ科	ウミスズメ科	コウライウグイス科	ゴジュウカラ科
アビ目	ノガン目	タカ目	オウチュウ科	キバシリ科
アビ科	ノガン科	ミサゴ科	カササギヒタキ科	ミソサザイ科
ミズナギドリ目	カッコウ目	タカ科	モズ科	ムクドリ科
アホウドリ科	カッコウ科	フクロウ目	カラス科	カワガラス科
ミズナギドリ科	ヨタカ目	フクロウ科	クキイタダキ科	ヒタキ科
ウミツバメ科	ヨタカ科	サイチョウ目	シジュウカラ科	イワヒバリ科
コウノトリ目	アマツバメ目	ヤツガシラ科	ヒバリ科	スズメ科
コウノトリ科	アマツバメ科	ブッポウソウ目	ツバメ科	セキレイ科
カツオドリ目	チドリ目	カワセミ科	ヒヨドリ科	アトリ科
グンカンドリ科	チドリ科	ブッポウソウ科	ウグイス科	ツメナガホオジロ科
カツオドリ科	ミヤコドリ科		エナガ科	ホオジロ科

表2 北海道の野鳥（日本鳥類目録改訂第7版、北海道鳥類目録改訂4版準拠）

キジ科	カイツブリ科（続き）	サギ科（続き）	セイタカシギ科
エゾライチョウ	ミミカイツブリ	ダイサギ	セイタカシギ
ウズラ	ハジロカイツブリ	チュウサギ	ソリハシセイタカシギ
ヤマドリ	ハト科	コサギ	シギ科
キジ(外来亜種コウライキジ)	カワラバト(ドバト)(外来種)	クロサギ	ヤマシギ
カモ科	キジバト	カラシラサギ	コシギ
サカツラガン	ベニバト	トキ科	アオシギ
ヒシクイ	アオバト	クロトキ	オオジシギ
ハイイログアン	アビ科	トキ	ハリオシギ
マガン	アビ	ヘラサギ	チュウジシギ
カリガネ	オオハム	クロツラヘラサギ	タシギ
ハクガン	シロエリオオハム	ツル科	オオハシシギ
シジュウカラガン	ハシグロアビ	ソデグロツル	シベリアオオハシシギ
コクガン	ハシジロアビ	カナダツル	オグロシギ
コブハクチョウ	アホウドリ科	マナヅル	オオソリハシシギ
ナキハクチョウ	コアホウドリ	タンチョウ	コシヤクシギ
コハクチョウ	クロアシアホウドリ	クロヅル	チュウシヤクシギ
オオハクチョウ	アホウドリ	ナベヅル	ハリモモチュウシヤク
ツクシガモ	ミズナギドリ科	アネハヅル	ダイシヤクシギ
アカツクシガモ	フルマカモメ	クイナ科	ホウロクシギ
カンムリツクシガモ	ハジロミズナギドリ	シマクイナ	ツルシギ
オシドリ	ハグロシロハラミズナギドリ	クイナ	アカアシシギ
オカヨシガモ	シロハラミズナギドリ	シロハラクイナ	コアオアシシギ
ヨシガモ	オオミズナギドリ	ヒメクイナ	アオアシシギ
ヒドリガモ	ミナミオナガミズナギドリ	ヒクイナ	カラフトアオアシシギ
アメリカヒドリ	ハイイロミズナギドリ	コウライクイナ	オオキアシシギ
マガモ	ハシボソミズナギドリ	ツルクイナ	コキアシシギ
カルガモ	アカアシミズナギドリ	バン	クサシギ
ハシビロガモ	ウミツバメ科	オオバン	タカブシギ
オナガガモ	クロコシジロウミツバメ	ノガン科	キアシシギ
シマアジ	コシジロウミツバメ	ノガン	メリケンキアシシギ
トモエガモ	ハイイロウミツバメ	カッコウ科	ソリハシシギ
コガモ	コウノトリ科	ジュウイチ	イソシギ
オオホシハジロ	ナベコウ	ホトトギス	アメリカイソシギ
ホシハジロ	コウノトリ	ツツドリ	キョウジョシギ
アカハジロ	グンカンドリ科	カッコウ	オバシギ
メジロガモ	オオグンカンドリ	ヨタカ科	コオバシギ
クビワキンクロ	コグンカンドリ	ヨタカ	ミユビシギ
キンクロハジロ	カツオドリ科	アマツバメ科	ヒメハマシギ
スズガモ	アカアシカツオドリ	ヒマラヤアナツバメ	トウネン
コスズガモ	カツオドリ	ハリオアマツバメ	ヨーロッパトウネン
コケワタガモ	ウ科	アマツバメ	オジロトウネン
ケワタガモ	ヒメウ	チドリ科	ヒバリシギ
シノリガモ	チシマウガラス	タゲリ	ヒメウズラシギ
アラナミキンクロ	カワウ	ケリ	アメリカウズラシギ
ビロードキンクロ	ウミウ	ムナグロ	ウズラシギ
クロガモ	サギ科	ダイゼン	サルハマシギ
コオリガモ	サンカノゴイ	ハジロコチドリ	チシマシギ
ヒメハジロ	ヨシゴイ	イカルチドリ	ハマシギ
ホオジロガモ	オオヨシゴイ	コチドリ	アシナガシギ
ミコアイサ	ミゾゴイ	シロチドリ	ヘラシギ
カワアイサ	ズグロミゾゴイ	メダイチドリ	キリアイ
ウミアイサ	ゴイサギ	オオメダイチドリ	コモンシギ
コウライアイサ	ササゴイ	オオチドリ	エリマキシギ
カイツブリ科	アカガシラサギ	コバシチドリ	アカエリヒレアシシギ
カイツブリ	アマサギ	ミヤコドリ科	ハイイロヒレアシシギ
アカエリカイツブリ	アオサギ	ミヤコドリ	タマシギ科
カンムリカイツブリ	ムラサキサギ		タマシギ

ツバメチドリ科	タカ科 (続き)	コウライウグイス科	ズグロムシクイ科
ツバメチドリ	オオワシ	コウライウグイス	コノドジロムシクイ
カモメ科	クロハゲワシ	オウチュウ科	メジロ科
クロアジサシ	チュウビ	オウチュウ	チョウセンメジロ
シロアジサシ	ハイイロチュウビ	カササギヒタキ科	メジロ
ミツユビカモメ	ウスハイイロチュウビ	サンコウチョウ	センニユウ科
アカアシミツユビカモメ	マダラチュウビ	モズ科	マキノセンニユウ
ゾウゲカモメ	アカハラダカ	チゴモズ	シマセンニユウ
ヒメクビワカモメ	ツミ	モズ	シベリアセンニユウ
ボナパルトカモメ	ハイタカ	アカモズ	エゾセンニユウ
ユリカモメ	オオタカ	オオモズ	ヨシキリ科
ズグロカモメ	サシバ	オオカラモズ	オオヨシキリ
ヒメカモメ	ノスリ	カラス科	コヨシキリ
ウミネコ	オオノスリ	カケス	ヤブヨシキリ
カモメ	ケアシノスリ	カササギ	レンジャク科
ワシカモメ	カラフトワシ	ホシガラス	キレンジャク
シロカモメ	カタシロワシ	ニシコクマルガラス	ヒレンジャク
アイスランドカモメ	イヌワシ	コクマルガラス	ゴジュウカラ科
カナダカモメ	クマタカ	ミヤマガラス	ゴジュウカラ
セグロカモメ	フクロウ科	ハシボソガラス	キバシリ科
オオセグロカモメ	オオコノハズク	ハシブトガラス	キバシリ
ニシセグロカモメ	コノハズク	ワタリガラス	ミソサザイ科
ハシブトアジサシ	シロフクロウ	ククイタダキ科	ミソサザイ
オニアジサシ	ワシミミズク	ククイタダキ	ムクドリ科
コアジサシ	シマフクロウ	シジュウカラ科	ギンムクドリ
コシジロアジサシ	フクロウ	ハシブトガラ	ムクドリ
マミジロアジサシ	キンメフクロウ	コガラ	シベリアムクドリ
セグロアジサシ	アオバズク	ヤマガラ	コムクドリ
エリグロアジサシ	トラフズク	ヒガラ	ホシムクドリ
アジサシ	コミミズク	シジュウカラ	カワガラス科
クロハラアジサシ	ヤツガシラ科	ルリガラ	カワガラス
ハジロクロハラアジサシ	ヤツガシラ	ヒバリ科	ヒタキ科
ハシグロクロハラアジサシ	カワセミ科	コウテンシ	マミジロ
トウゾクカモメ科	アカショウビン	ヒメコウテンシ	トラツグミ
オオトウゾクカモメ	ヤマショウビン	コヒバリ	カラアカハラ
トウゾクカモメ	カワセミ	ヒバリ	クロツグミ
クロトウゾクカモメ	ヤマセミ	ハマヒバリ	クロウタドリ
シロハラトウゾクカモメ	ブッポウソウ科	ツバメ科	マミチャジナイ
ウミスズメ科	ブッポウソウ	ショウドウツバメ	シロハラ
ヒメウミスズメ	キツツキ科	ミドリツバメ	アカハラ
ハシブトウミガラス	アリスイ	ツバメ	ノドグロツグミ
ウミガラス	チャバラアカゲラ	コシアカツバメ	ツグミ
ウミバト	コゲラ	ニシイワツバメ	ノハラツグミ
ケイマフリ	コアカゲラ	イワツバメ	ワキアカツグミ
マダラウミスズメ	オオアカゲラ	ヒヨドリ科	ヨーロッパコマドリ
ウミスズメ	アカゲラ	ヒヨドリ	コマドリ
カンムリウミスズメ	ミユビゲラ	ウグイス科	オガワコマドリ
ウミオウム	クマゲラ	ウグイス	ノゴマ
コウミスズメ	ヤマゲラ	ヤブサメ	コルリ
シラヒゲウミスズメ	ハヤブサ科	エナガ科	シマゴマ
エトロフウミスズメ	チョウゲンボウ	エナガ	ルリビタキ
ウトウ	アカアシチョウゲンボウ	ムシクイ科	セアカジョウビタキ
ツノメドリ	コチョウゲンボウ	モリムシクイ	クロジョウビタキ
エトビリカ	チゴハヤブサ	ムジセッカ	ジョウビタキ
ミサゴ科	シロハヤブサ	カラフトムジセッカ	ノビタキ
ミサゴ	ハヤブサ	カラフトムシクイ	イナバヒタキ
タカ科	ヤイロチョウ科	キマユムシクイ	ハシグロヒタキ
ハチクマ	ヤイロチョウ	オオムシクイ	セグロサバクヒタキ
トビ	サンショウクイ科	エゾムシクイ	イソヒヨドリ
オジロワシ	サンショウクイ	センダイムシクイ	ヒメイソヒヨ

ヒタキ科 (続き)	セキレイ科 (続き)	アトリ科 (続き)	ホオジロ科 (続き)
エゾビタキ	キガシラセキレイ	アカマシコ	カシラダカ
サメビタキ	キセキレイ	オオマシコ	ミヤマホオジロ
コサメビタキ	ハクセキレイ	ギンザンマシコ	シマアオジ
マミジロキビタキ	セグロセキレイ	イスカ	シマノジコ
キビタキ	マミジロタヒバリ	ナキイスカ	ズグロチャキンチョウ
ムギマキ	コマミジロタヒバリ	ウソ	ノジコ
オジロビタキ	ビンズイ	シメ	アオジ
オオルリ	セジロタヒバリ	コイカル	クロジ
イワヒバリ科	ムネアカタヒバリ	イカル	シベリアジュリン
イワヒバリ	タヒバリ	ツメナガホオジロ科	コジュリン
ヤマヒバリ	アトリ科	ツメナガホオジロ	オオジュリン
カヤクグリ	ズアオアトリ	ユキホオジロ	ゴマフスズメ
スズメ科	アトリ	ホオジロ科	ウタスズメ
イエスズメ	カワラヒワ	シラガホオジロ	ミヤマシトド
ニューナイスズメ	マヒワ	ホオジロ	キガシラシトド
スズメ	ベニヒワ	シロハラホオジロ	サバンナシトド
セキレイ科	コベニヒワ	ホオアカ	
イワミセキレイ	ハギマシコ	コホオアカ	以上472種
ツメナガセキレイ	ベニマシコ	キマユホオジロ	

まずはこれくらいにしておきます。分類が変わっても鳥自体が変わったわけではありませんから、とりあえずは(7)の「コメボソムシクイがオオムシクイになりました」ということだけを頭に入れておけばいいのかもしれない。種類数について、472種中には、トキのような野生絶滅種とか、ずっと昔に1回しか記録がないものとか、標識調査でないと識別できないものとかも含まれていますから、実際に見ることができる鳥、名前がわかる鳥は、人にもよりますが、かなり少なくなると思います。

表3は亜種についてのものです。1つの種の中に複数の亜種がある場合、亜種の1つは種と同じ名にするという取り決めがあります。表3には北海道で複数の亜種の記録があるものと、北海道では1亜種だけだけれども、その亜種名が種名とは違っているものを載せています。

表3 北海道の亜種

種	亜 種	種	亜 種
ヤマドリ	ヤマドリ, ウスアカヤマドリ	オオアカゲラ	エゾオオアカゲラ
キジ	コウライキジ	アカゲラ	エゾアカゲラ
ヒシクイ	オオヒシクイ, ヒシクイ	ハヤブサ	ハヤブサ, オオハヤブサ
ハクガン	ハクガン, オオハクガン	カケス	ミヤマカケス
シジュウカラガン	シジュウカラガン, ヒメシジュウカラガン	コガラ	カラフトコガラ, コガラ
コハクチョウ	コハクチョウ, アメリカコハクチョウ	ヒバリ	オオヒバリ, カラフトチュウヒバリ, ヒバリ
コガモ	コガモ, アメリカコガモ	ウグイス	カラフトウグイス, チョウセンウグイス, ウグイス
カワアイサ	カワアイサ, コカワアイサ	エナガ	シマエナガ
ダイサギ	ダイサギ, チュウダイサギ	ゴジュウカラ	シロハラゴジュウカラ
アマツバメ	キタアマツバメ	キバシリ	キタキバシリ
シロチドリ	ハシボソシロチドリ, シロチドリ	ノドグロツグミ	ノドグロツグミ, ノドアカツグミ
セイタカシギ	セイタカシギ, オーストラリアセイタカシギ	ツグミ	ツグミ, ハチジョウツグミ
アジサシ	アカアシアジサシ, アジサシ	ツメナガセキレイ	マミジロツメナガセキレイ, ツメナガセキレイ
ウミバト	ウミバト, アリョーシャンウミバト	ハクセキレイ	ハクセキレイ, ホオジロハクセキレイ
オオタカ	シロオオタカ, オオタカ	ビンズイ	カラフトビンズイ, ビンズイ
フクロウ	エゾフクロウ	カワラヒワ	オオカワラヒワ, カワラヒワ
アオバズク	チョウセンアオバズク, アオバズク	ギンザンマシコ	コバシギンザンマシコ, ギンザンマシコ
ヤマセミ	エゾヤマセミ	ウソ	ベニバラウソ, アカウソ, ウソ
コゲラ	エゾコゲラ	シメ	シベリアシメ, シメ

— 新聞情報から —

八雲町海岸にクロヅル

広 報 部

2012年12月7日北海道新聞朝刊地方版(函館・渡島・桧山)で、八雲町花浦の海岸にクロヅルが姿を現したことが写真付きで報道されました。付近に住む漁業武部克郎さんが12月5日の午前11時ごろに見つけたとのこと。その後、姿が見えなくなったことから、記事では「数時間砂浜にとどまり、…」となっていますが、実際には同所にしばらく滞在しました。このクロヅルにつき、武部さんから知らせを受けて撮影をした同町の森奈津子さんから写真を寄せていただくとともに、やはり同町の田澤和夫さんから、滞在時の様子などを知らせていただきました。飛来個体は体色が灰黒色で、顔と頸の白黒の部分がはっきりしていることから、成鳥とみなされます。以下、現場の海岸に毎日通って観察を続けた田澤さんのお話です。

『タンチョウに比べると一回り小さく、声も小さかった。飛来当初、右足に血のりのようなものがついていたので、怪我をしているのかなと心配したけれども、海岸で元気に餌(貝や鮭の身)をついばんだり、飛んでいたりしていた。朝にやってきて、午後2時すぎに、海岸から山の方にある牧場に飛んでいくのが日課だった。海岸ではほぼ1kmの範囲で移動を繰り返していた。初めのうちは、頭を背中に入れて片脚立ちで寝ていることが多かったけれども、1週間を過

ぎたころからよく飛ぶようになった。』

12月22日の観察が最後ということですから、18日間の滞在でした。以後の消息は不明です。

日本には、毎冬少数が鹿児島県の出水平野に渡来しますが、他の地域では希です。北海道鳥類目録改訂4版(藤巻裕蔵 2012)によると、北海道では迷鳥で、主にタンチョウの群れに混じって農耕地や湖沼周辺の湿原に飛来するとのこと。これまでに10例前後の飛来例があるようですが、ここ7,8年は確認されていなく、久々の記録です。海を背景とした写真はなかなか結構です。



クロヅル 2012.12.5 八雲町 森奈津子さん撮影



ウトナイ湖

2012.11.11

北山 政人

青空が広がり、穏やかな空のウトナイ湖でした。風は少々ありますが、野外で活動するのに支障がでるような状況にはならないようです。とりあえず安心でした。冬を前にして、南へ向かう途中のカモ類などが多くいるはずですが。以前と違い、オオハクチョウやオナガガモなどへ餌付けが行われていないので、「道の駅」の裏手の湖畔には近くに來るカモ類などが少なくなりました。個人的な意見としては、野生の生き物と人間は、ある程度の距離を持つ事は当然だと思います。

湖面にはオオハクチョウやマガン、ヒシクイ、オオバン、オナガガモやヒドリガモなどがいます。ガン類の多くは餌を食べるために湖の外に出ているようです。オオバンは北海道において、一昔に比べると、よく目につくようになりました。また、この日、ウトナイ湖サンクチュアリ シンボルとして看板などにも登場しているアオサギが見られず、

ダイサギが何度も見られるという事もおきました。ダイサギも北海道においては、観察例の増えてきている種です。

上空をノスリ、オジロワシ、オオワシが飛びました。また対岸ではチュウビも飛びました。チュウビは北海道においては草原や湿地帯などで、夏鳥として見られる個体が多いのですが、積雪の少ない所では真冬にも見られる時があります。しかし、チュウビの生息する場所に冬になると良く見られるのはハイロチュウビなどの冬鳥の猛禽類なので、多くは本州の雪があまり積もらない場所へ渡っていきます。エナガの群れや、キバシリも見ました。種類数が特に、多く出たり、珍しい種類が出たりした訳ではないのですが、水辺の鳥から森の鳥まで、バランス良く観察できたウトナイ湖の探鳥会でした。

【記録された鳥】ヒシクイ、マガン、コブハクチョウ、オオハクチョウ、ヨシガモ、ヒドリガモ、マガモ、オナガガモ、コガモ、ホオジロガモ、カワアイサ、ハジロカイツブリ、ダイサギ、オオバン、トビ、オジロワシ、オオワシ、チュウビ、ノスリ、アカゲラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、エナガ、ゴジュウカラ、キバシリ、ツグミ、ハクセキレイ、カワラヒワ、ベニマシコ

以上33種

【参加者】阿部真美、荒木良一、今村三枝子、岩崎孝博、内山英晋、大瀧恵二、北山政人、河野美智子、小堀煌治、坂井伍一、品川睦生、島田芳郎・陽子、高橋良直、田中陽・雅子、辻 雅司・方子、中正憲信・弘子、畑 正輔、原 美保、樋口孝城、本間康裕、松原寛直・敏子、横山加奈子、吉田慶子、吉中宏太郎・久子、鷺田善幸

以上31名

【担当幹事】北山政人、鷺田善幸

野幌森林公園

2012.12. 2

【記録された鳥】オジロワシ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、キクイタダキ、ハシブトガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ヒヨドリ、エナガ、レンジャクsp、ゴジュウカラ、キバシリ、ツグミ、ウソ

以上17種

【参加者】秋山洋子、今村三枝子、遠藤朱美、大表順子、太田敏枝、川東保憲・知子、荃津晴美、栗林宏三、グローズ千鶴子、後藤義民、小堀煌治、坂井伍一、品川睦生、島田芳郎・陽子、清水朋子、道場 優、中正憲信、南條沙也香、野田貴代子、畑 正輔、辺見敦子、松原寛直・敏子、横山加奈子、吉田慶子、渡会やよひ

以上28名

【担当幹事】坂井伍一、島田芳郎

小 樽 港

2013. 1. 13

青山 留美子

北海道野鳥愛護会の皆様、はじめまして。私はよく野幌森林公園を散策しに行きますが、目的は主に植物を見るためです。そのためほとんど下を向いて歩いています。しかし、鳥の声が聞こえてくると足を止め、上や周りを見回し鳥の姿を探す事で、樹木や空に目が行き、やっと森の景色に気がつく事が多いように感じます。私にとっては、森の中でちょっと見方を変えるきっかけをくれるのが、鳥の声です。そして次第に、その声の主はどんな鳥なのかにも興味を持つようになりました。そんな折、1月12日の講演会があることを知り参加したところ、翌日のバスツアーの申し込みにまだ余裕があるというアナウンスのおかげで、13日の小樽への探鳥会に参加させていただける事になったのです。新年早々とても“ラッキー”でした！素人が一人で双眼鏡などもないまま参加することは、後々考えると不安だらけのはずが、その日の私は嬉しさに意気揚々としていたと思います。

当日、寝坊せずにちゃんと起きることができずが不安で、ほとんど眠ることができませんでした。眠さと戦い、必死で札幌駅北口を目指しました。北口に差し掛かった所で、私に声をかけて下さった方が受付の場所を教えてくださいました。受付からバスまで誘導もして頂きました。また、バスに乗ると手招きして下さる方がおり行ってみると、な

んと双眼鏡を貸して下さいました。バスの出発前に既に、皆様の優しさにとっても感動しました。その後も、双眼鏡のことを気にかけて声をかけて下さる方、望遠鏡を随時助めて下さる方、寒くないかとカイロを下さる方、鳥の名前以外の事もいろいろ教えて下さる方など、常に皆様の優しい心遣いに感動しておりました。

そして、そんな皆様に教えていただき、たくさんの鳥を見ることができたことにも感動しました。カモやカモメの種類が多さに驚き、ケイマフリやウミガラスを見ることができるとは思いもしなかったため「本当かな～」と少し疑うほど驚き、鳥だけではなくトドが小樽で見られることにも驚きました。知らないことが多く、驚きの連続でした。皆様の心遣いと知識のおかげで、とても楽しい有意義な一日となりました。朝、眠さと戦い頑張った甲斐がありました。本当にありがとうございました。

私の中で一つだけ悔いが残る点が…、それは、寒さ対策です。植物を観察するときよりも止まっている時間が長いことを考えず、鳥を見るときは寒さを侮っていました。次回参加するときは、足元を暖かくし、カイロをたくさん用意して望みたいと思います！

今回は大変お世話になり、ありがとうございました。

【記録された鳥】マガモ、スズガモ、シノリガモ、ホオジロガモ、ウミアイサ、アカエリカイツブリ、カンムリカイツブリ、ミミカイツブリ、ハジロカイツブリ、アビ、オオハム、ヒメウ、ウミウ、ワシカモメ、シロカモメ、オオセグロカモメ、ウミガラス、ケイマフリ、トビ、オジロワシ、オオワシ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、シジュウカラ、ヒヨドリ、ツグミ、スズメ、ハクセキレイ、ハギマシコ、ドバト

以上30種

【参加者】青山留美子、五十嵐加代子、井上詳子、岩井茂、岩崎孝博、内山英晋、梅木賢俊、梅原 進、大表順子、岡部良雄・三冬、加藤睦子、栗林宏三、桑原みは子、坂井伍一、志田博明、品川睦生、白澤昌彦、高正みちえ、高橋きよ子、高橋良直、立田節子、辻 方子、戸津高保、中正憲信・弘子、中田勝義、畑 正輔、浜野チエ子、原 美保、樋口孝城、辺見敦子、本間康裕、松原寛直・敏子、山本昌子、横山加奈子、渡会やよひ

以上38名

【担当幹事】梅木賢俊、品川睦生、畑 正輔

鳥 民 だ よ り

◆新著紹介（北海道野鳥愛護会顧問 藤巻裕蔵）

1. 藤巻裕蔵. 2012. 北海道鳥類目録改訂4版.

極東鳥類研究会

2012年に発刊された日本鳥類目録改訂第7版では、改訂第6版に比べると科や種の配列が大きく変わり、学名にもかなり変更があった。北海道鳥類目録改訂4版ではこれらの配列や学名にしたがって改訂した。今回北海道の鳥類の記録としてとりあげたのは471種（3版では451種）で、このうち45種については分布図もつけた。また目録に含めなかった14種も挙げた。最後に北海道の鳥類相の概要

について述べてある。また、文献表は北海道における鳥類分布に関する文献のデータベースとしても活用できる。B5版、78ページ、1000円。札幌市内ではエコネットワーク（北区北9条西4丁目エルムビル8階）で販売している。

なお、4版以降に新たな記録追加などで記述内容を変更した種や追加文献については、藤巻のホームページ <http://www16.ocn.jp/~bonasa/> の「北海道鳥類目録改訂4版・補遺」に掲載している。2013年1月1日現在で記述内容を更新したのは8種になっている。

2. 藤井忠志, 2012. 総説「日本のクマガラ」.

岩手県立博物館調査研究報告書 (29): 1-39.

この報告書は「北東北三県における本州産クマガラ個体群の生息状況およびその生態に関する研究」について継続的に行ってきた調査研究活動の成果であると、まえがきには書かれているが、内容は世界・日本のキツツキ類の紹介、クマガラの研究史、繁殖生態、その他の生態、クマガラの利用木、生息域と生息環境、生息を脅かす様々な要因、日本のクマガラの保護対策と内容は多岐にわたっている。また、東北地方だけではなく、北海道における生態、生息環境にもふれており、まさに「総説」になっていて、クマガラに関心をもつ人は一読に値する報告書である。A4版、39ページ。なお、本書の入手については著者の藤井忠志さんに問合せされたい。〒020-0102 岩手県盛岡市上田字松屋敷34, 岩手県立博物館。

◆野鳥写真展と写真募集のお知らせ

昨年と会場が変更になりますのでご注意願います。

会場：札幌エルプラザ 4階多目的スペース

札幌市北区北8条西3丁目

JR札幌駅地下直結又は北口出口の北向い

期間：平成25年5月13日(月)～5月24日(金)

9:00～22:00 (ただし24日は16:00まで)

- ・写真は最近3年以内に北海道内で撮影したもので、サイズは四つ切、デジタル写真はA4版。鳥の名前、撮影者、撮影年月、撮影場所を必ず添付して下さい。
- ・5月7日までに愛護会事務所（北海道自然保護協会）送付あるいは直接届けて下さい。
- ・5月9日に事務所にて額付・加工・キャプション作成などを行い、13日に会場にて展示作業を行います。お手すきの方はご協力下さい。

なお、引き続き野幌自然交流館で6月に開催を計画しております。

問い合わせは、小堀煌治 (011-591-2836)

畑 正輔 (011-894-0017) まで

◆総会のご案内

日時：平成25年4月12日(金) 午後6時30分

場所：かでの2・7 110会議室(1階)

総会終了後に懇親会を予定しています。

◆訂正とお詫び

前号(第170号)の表紙写真の鳥名が編集段階の不手際でシロハラホオジロと記されていますが、正しくはツメナガホオジロです。お詫びして訂正致します。

【新しく会員になられた方々】

村田 睦子(札幌市北区) 五十嵐加代子(札幌市東区)

杉山 豊(札幌市白石区) 平谷 潤子(川上郡弟子屈町)

若松久仁男(千歳市) 荒井 克則(札幌市東区)

—宿泊探鳥会のお知らせ— 天売・焼尻島

今年は2泊3日で天売・焼尻島です。ウトウなど島で繁殖する鳥たち、渡り途中で立ち寄る鳥たちなど、たくさんの鳥を楽しめそうです。



月 日 5月3日(金)～5日(日)

集合場所 札幌駅北口「鐘の広場」

集合時刻 3日午前7時30分

1日目(3日)：札幌→羽幌港→焼尻港→焼尻島内探鳥

2日目(4日)：(早朝探鳥)→焼尻港→天売港→天売島内探鳥→ウトウ観察

3日目(5日)：(早朝探鳥)→天売島内探鳥→天売港→羽幌港→札幌

札幌帰着 5日午後6時頃

定 員 45名

参加費用 38,000円(バス代、宿泊代、食事は3日昼食から5日昼食まで)

宿 泊 1日目：焼尻島布目旅館

2日目：天売島旅館青い鳥

申込み先 佐々木 裕 宿泊探鳥会担当幹事
電話 011-596-2660

※4月1日(月)午前9時から電話で受け付け、定員になり次第締め切ります。

※午前中は電話が混み合いお待ちいただくことがあります。話し中でも、ツーツーという音は発信されませんが受付致しておりますので、おかけ直し下さい。

旅行代金 申込み終了後から4月15日(月)までに下記口座に振り込んで下さい。

北洋銀行 札幌駅南口支店

口座名 (株)エイチ・ビー・シー・ビジョン

口座番号 3790202



- ☀ 探鳥会は悪天候でない限り開催します。
- 👁 双眼鏡などの観察用具、昼食、筆記具、野鳥図鑑などをご持参下さい。
(探鳥地や当日の天候に応じて、防寒衣、雨具、長靴などをご用意下さい。)
- 🚶 公共交通機関を利用される場合には、事前に時刻・時間などをお確かめ下さい。
- ★ 探鳥会の問い合わせ
(社) 北海道自然保護協会 ☎011-251-5465 午前10時～午後4時(土・日祭を除く)

開催日	探鳥地	集合場所及び集合時刻
4月14日(日)	野幌森林公園	大沢口 午前9時
	夕鉄バス：新札幌駅発(文京通西行)「大沢公園入口」下車、又はJRバス：新札幌駅発(文京台循環線)「文京台南町」下車、徒歩各5分。 夏鳥たちが渡ってくる時期です。木々の芽が開き始めた森の中を、鳥たちのさえずりを聞きながら歩きます。	
4月21日(日)	宮島沼	湖畔 午前10時
	中央バス：岩見沢ターミナル発(月形行)又はJR石狩月形駅発(岩見沢行)「大富農協前」下車、徒歩10分。 北への渡り途中のマガンたちが集結します。湖面で羽を休め、えさ場を行き来する姿は壮観です。暖かい服装で。	
4月28日(日)	モエレ沼	ガラスのピラミッド前 午前9時30分
	中央バス：地下鉄東豊線環状通東駅発(北札幌線東69番・東79番)「モエレ公園東口」下車、徒歩15分。 開水後の沼に浮かぶカモ類やオオバンなどの水鳥群、沼畔湿地草原や公園林の小鳥類を楽しみます。	
5月3日～5日	天売・焼尻島	
	詳細は今号一宿泊探鳥会のお知らせを参照してください。	
5月6日(月)	藤の沢	白鳥園 午前9時
	定鉄バス：札幌駅又は地下鉄真駒内駅発(定山溪温泉行又は豊滝行)「藤野3条2丁目」下車、徒歩10分。 藤野マナスル(岡田の山：316m)をウグイスやオオルリなどの声を聞きながらゆっくりと巡ります。	
5月12日(日)	野幌森林公園	大沢口 午前9時
	4月14日の案内を参照してください。 夏鳥が勢揃いします。木の間に見え隠れするキビタキ、梢でさえずるオオルリなど魅力いっぱいです。	
5月19日(日)	千歳川	さけますふ化場手前の橋付近の広場 午前8時
	公共の交通機関はありません。 千歳川沿いに発電所ダムまで行きます。たくさんの夏鳥が見られます。ヤマセミもきっと楽しめます。	
5月26日(日)	鵲川河口	鵲川温泉四季の館 駐車場 午前9時45分
	道南バス：札幌駅前又は大谷地バスターミナル発(浦河行/ペガサス号)「四季の館前」下車。 鵲川河口と人工干潟のシギ・チドリ類がメインです。時にはチュウヒやハヤブサも現れます。	
6月1日(土)	野幌森林公園	大沢口 午後6時30分
	4月14日の案内を参照してください。 昨年まで実施していた平和の滝探鳥会を場所を代えて行います。どんな鳥の音が聞けるか楽しみです。懐中電灯や防虫剤の用意を。	
6月2日(日)	植苗ウトナイ	JR千歳線植苗駅前 午前9時10分
	JR千歳線 植苗駅下車。 鳥の囀りを聞きながら植苗駅からウトナイ湖へ向かいます。道沿いの森や湖畔草原の鳥たちを楽しみます。	
6月9日(日)	厚別川	川下公園駐車場 午前9時
	中央バス：地下鉄東西線白石駅発(川下線白24番)「川下公園前」下車。 厚別川の堤防を歩きます。草原の鳥が勢揃いし、林の鳥たちも楽しめます。	
6月16日(日)	野幌森林公園	大沢口 午前9時
	4月14日の案内を参照してください。 鳥たちにとって一番忙しい子育ての季節です。初夏の花も咲きそろい、鳥と野の花の両方を楽しめます。	
6月30日(日)	福移	福移小中学校前 午前9時
	中央バス：地下鉄環状通東駅発(北札幌線)「福移小学校通」下車、徒歩5分。 石狩川堤防内外の草原や、石狩川・豊平川合流点の鳥を楽しみます。カワセミも期待されます。	

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より) 郵便振替 02710-5-18287
〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465
HPのアドレス <http://homepage2.nifty.com/aigokai/>